番組

仕舞

藤　キリ　金森秀祥

山姥　キリ　金井雄資

地　渡辺茂人
　　藪　俊彦
　　藪　克徳

狂言

鬼瓦　野村祐丞　荒井亮吉

能

井筒

シテ　大坪　喜美雄

ワキ　苗加登久治

間　荒井亮吉

後見　藪　俊彦
　　藪　克徳

地　前田長孝
　　寺田　茂
　　大沢永靖
　　山崎　健

ワキ　野尻哲雄
　　住駒俊介

　　瀬賀尚義

　　渡辺茂人
　　金井雄資
　　金森秀祥
　　川島英治

井筒

五流

（三番目物・二場）

作者　世阿弥
季　秋（九月）
所　大和・在原寺

奈良の七大寺への参詣をすませた諸国一見の僧（ワキ）が、初瀬への途中、在原寺に立ち寄り、業平と紀有常の娘の後世を弔っていると、里の女（前シテ）が来て、人の世の定めなさを独りごちながら井戸の水を汲んで古塚に手向ける。それを見て、どういう人かと尋ねると、女は初めは、自分はこの辺りの者で、この寺の建立者で後世に名を残した在原業平の塚であろうかと弔うのだと答えるが、さらに問われて、「風吹けば沖つ白波龍田山　夜半にや君がひとり行くらん」の歌や「筒井筒井筒にかけしまろがたけ　生ひにけらしな妹見ざる間に」「くらべこし振分髪も肩過ぎぬ　君ならずして誰かあぐべき」の歌にまつわる伊勢物語の恋物語を語り、実は自分は紀有常の娘すなわち井筒の女だと名のって井筒の陰に隠れる。〈中入〉。その夜、在原寺にまどろむ旅僧の夢に紀有常の娘の霊（後シテ）が現れて、業平の形見の直衣を身につけ、業平になった気持ちで舞〈序舞〉を舞い、続けて伊勢物語の「月やあらぬ」や「筒井筒」の歌の詠まれた往事を懐かしみ、冠直衣姿を井戸に映しては我を忘れて業平の面影を追慕する。……と見るうちに、女の霊の姿はおぼろにうすれ、在原寺の明けの鐘とともに、旅僧の夢は覚める（一時間五五分）。

◆典拠　『伊勢物語』二三段、一七・二四段とその古注書など

◆作り物　正先に薄のついた井筒の台

参考　井筒の台には高低があり、高い場合には後シテは中腰で、低い場合には坐って井筒をのぞく型になる。「井筒の女」とも称した。